

はじめに

本原稿は書斎の茶封筒に埋もれていた、六十歳頃のNHK放送用に準備した元原稿です。題名は明記されてなく仮の題名で掲載しています。

「小説を何故読むのか」

芹沢光治良

小説を何故読むかと、よくきかれることがあります。何故小説を書くかときかれるのでしたら、三十年近く小説を書いているのですから、答えることは簡単ですが、何故読むかというのは、実はこちらからききたいことです。こう質問するのは若い人―特に若い女性に多いです。それが、小説の正しい読み方を質問するならば、わかるが、よく話をきいてみると、たいていの場合、小説を読んで、どんなとくがあるかということのようです。

小説を読んで得ることといったら、まあいろいろあるうが、第一に、他人の身になってみるくんれんをすることができるということであろうと思います。自然に小説の主人公の身になって悲しんだり、喜んだり、考えたりして、自分の他に他人のあることを、はっきり知ることができます。他人とともに生きていることを、知ることです。こんなことは小説を読まなくても、毎日の生活のなかで、よく知っている筈ですが、しかし、他人の身になる修練をしない人は、自分だけあって、他人があることを知らないような生き方をするものです。何事も自己が中心になって、他人を無視して、がりがりもう者のように生きていきます。こういう人といっしょに暮したら、動物といっしょに暮らすようで、あじきなく、辛いことが多く不幸であります。又、自己中心に生きている人は、自分を他人のように眺める―自分を客観的に眺めることができなから、時には自分自身をもてあまして、いっしょに暮らすものにぶつかることが多いです。小説を読むことで、私たちは、自分を小説の主人公にして観察する修練をすることが出来ます。他人の身になる修練をするばかりでなく、自分を客観的に見ることが出来ます。例えばヒステリーをおこして気持のどうにもならない時、自分をヒステリーをおこしている女の主人公のようにして、眺めることで、ヒステリーをおさえることもできます。自分の気持ちに余裕を持てるのです。

映画を見ても、主人公の身になることができ、同じ修練をすることができ

ますが、映画は感覚的にうったえられるだけで、途中でとどまって、主人公になつて考える余裕を与えません。映画は二時間なり二時間半なり映画を見ている時には、主人公になつていられるが、映画館から明るい所に出るし、それでおしまいになります。感覚的に与えられるから場面の印象が強くなるので、主人公の人間性が持続して、長く見る者を動かすことが少ないです。それに反して、読書の場合は、読む方が努力して考えながら時をかけて鑑賞するので、自然に知的に与えられるから、作者の精神とか、主人公の人間性が持続的に長く心にのこります。こんな風に、読書―小説をよんで得たものが、言いかえれば、他人の身になる習慣や自分を客観的に見る修練が、その人の人間的なかおりになるのだらうと思います。ですから、どんな美しい人でも、読書をしない人は、かおりのない花のようです。

若い人々で、これから結婚する人が恋愛したり、見合したりする場合に、小説をよむか読書がすきかどうかを、選択の一つの標準におくといいと思います。読書をしないような人、小説を読まないような人は、他人の身になる修練をしていないから、結婚した後、何事も自分本位で、貴方の身になつてみるということがないことを承知しなければいけません。小説を読むと言つたら、どんな小説を読むかきいてみるといいです。そして、その小説について話しあつてみるといいです。大体相手がどんな人間か知ることができると思います。